



• 0 1 2 1m 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

JAPAN

門人遠 13

號 113

卷

春色惠の巻 卷之三

江戸
狂訓亭主人作

明治三十一年十月十八日
碑文

せんせん
金をもつてさうよ名づいた指わきりとゆゑで呼ぶこと
よあくざらど人の吉祥不祥をあがむが常なるか
えんざもうかととようして極悪妄情とすらるゝの成
貞女あくまでこゆものへ屬るぬ此方の務より改め
あん身とまとうけく被され、あの本多算が田舎へゆく
てお伝もせざりしやふさぞうみ假ともつりん意
もおひきさんと身ね度てそよごひよび初雪うら
廻一宿したの跡と成あらへく青うみ辯ひが一床

おも修くあんざうを極ふよれどよせうて腰中根とぞりいざ
一裏紙ひりてせざりがたの姿と障子の外あおりとく
き眼さるるあらゑが御弓ばかり游ぶことをきくねう
した些姿とくへりあらざりありても繩が破れて多く
の入ふきあらゆへせぬもぐとてらだへへかあらう
のゆふあらゆも育よしとくせうに學へあらが知
らせよせりとくとくまももそのひとをあい
がりよに生れ事へちねうをあーてよらうす

まことに後の大紙のちにもまことに今まよ悪くわいもの粉こ
別またこは後のちの毛け紙かみもまことに今まよ悪くわいもの粉こ
見える女の毛け物ものよ一いちせいせんあるあめごとくが
こゑこゑむせかくまく跨せますの内うちくまうびひまくが
糸いとの例たとえ「また見えまあで西にしまき」とトトうさがり
よほらよほらせばまあで西にしまきかまくらりくらり義ぎ、おづくゆびつをじ
あをぐくあをぐくきをまもりあううううととづまうづやがちくちくひそひそ蒲ふ
ととええ毛けのううよりわげく様ようひづれて鳥とりとかねは東とうの反かた
ひまは弟おとこの法ほうとまくとと義ぎのとあくへくとと義ぎ

とさうすうごく まへる見る男とかくよびりうぐふ ねも
角も様見こむ。ヨヨコレナ かあがく トひきをきくと
とあと まくと えと ねと み
と此多く漏と缺く まくすのぬくとあ ひモシエ
まえ まへ正 えど まへや ねがとえまきよきのと
ゆく まへりとむ まくとあ ひとあんせんのと まへナニ
ゆかとまくのとむ まくと ま
ちう まくと まくと ま
助かばあくわどのかくもあくと まくと ま
か ま
まと ま

わくそよ学のかわんわくの振るわのが娘の時
だのチラスダリモテアリ人の手支ゲコリララ
ラムド一通りの初會の客と新進花屋もた
ラムテアシタハス好男の花屋もたレ振
折節あらうと喜りゆきの事なくともりき記
物をヨードモレバ花びらはトモトモねすみの
美也胸の女にとりまつて慕の情がどみ
くわうるおとりひじりの事もなきぞよきの事

ひとありー恋のつとありひよけくとおまうき胸
ユアキリーラジとと体くうくかくとあうさんふも只然
ーとき先達くとあらゆるる源の東をもひもあくは折
キあんざういこちも
モ筋新造糸糸がわくとーく
キ、かわくへくと隣まの外よりよびとらまが「アイ
エド　さきごまを
トモテアリも後寝坐しゆゑへとおなあーおアレせー
あくはくをあらうもの審すうちくくりのどちら
ちのともあくアリシマサ「十三宣せまくちらアだ



さうそき切まよ オイヤく そまくひのう間まご 自然
らへひぐままりうく ちあく ふあく す 安やすむする かく
えや き と く
今夜まことにオハニ森もりも角つのもせうりつとたゞひよ
修よむちよーもあよよ 今は限ぎつコトドキことねねうち
よよと往うく來きよ そそからうんうんへく そそるああ往う
まうりんうりんをああ食くまうてかかせよキヨト淫いん穢けいくくそ
廊ろう下へまちまちそそれれとゆうととふ表あらわささだのから
ささやだゆだゆ腰こしよその夜よもおおけけくく本ほんの宿しゆくも後あと

とまくまくまちまちから まだ夜よ未みそれより さくよ 水みずをあよ
る ひく そあくあくよ 駄だ行ぎけけぶ うけうけく ままかんくかんく
地ぢまくまくの髪かみもまざまざともあよよああの うらううらうゆゆて 厥つみみ
春はる唄うたも ううげげようようととああの ままいいとと妻め
よ風よかぜが吹ふくくる 夜よの ままいいの ああいいの ままいいとと妻め
ああと ひらええま はああ一い人ひとか間まよの かかいいすすて ほほううそその 人ひと
ははううゆゆりりままるる水みずを せせだだままくくああの 夜よと ああの 夜よ
ままむむかかくくモモ一いままを 畠はたけの ねねと ああーーくくも ううつつううく

わざわざあがつよもののかく折角さづ稀來し申候
も海の血絵又セーのいとぞき一絆の女玉へあくさを
けりと毛あとは一のこゝに限とありもせば再度
合んよまでもあ一女の後もむじかえをかと受け
ぎのうも笑からざる今きみまきと餘方あく寐正も
やくぬそめゆゑあたへ被ますをあがざれよか一春の
なまきみとうとおまね酒をあとすぢふ「おやさん」をあはせられエ
さうおまくお紙をあんまきる「アイト」とさうふひで

お
考の魚をかへき一想き お「おやさんへ吉田屋の客人の
事であつたあんまくへ やあせざまくへおへんへおね
ざくまくらうとおひいきそともよほでんがせんよ
ち。 また 金やど好ごんきんざまくへざくそきゑあぐよんぐか
あげあんじよ 「どうも景を采うひむを お「女をちゆ一
あきる おまちう吉田屋の内へお會お女もやまえせん
るおやんよお紙ざまを稀へトりひるぐく巻をわらじ
ふだむ
考の魚をあへく お「サアアアおまくさでもおわんあまト

ひあは記してだましくとえきまふ様へまうりと
より二人かうが様りょうとあるのうきをもる中うちからもひあへ半
ばあがこととのうへどもたすくあわせ小もくらへ
をまへたれもせざまくあどるに男の身のうへ憂
もくもく一ひとの落おちけよもあらね辛さいれが様ようと称ゆめ
くとくとすゞよ苦くわやをやくちの時ときにかほしみの
なまどとゆう病びやくやをやくちの時ときにかほしみの
隣となりのわきわきやそくや夜よの秋あきの秋あきとまえ

ヨウモウそうとせーわーりやうほくの産うぶたりあい
おまな客きうかくきる者もの小こ舞まいよさくよ一いち幕まく
も清元きよゆんの新しん桂けい八や湘川しょうせん如ご臯き名めいの他ほか
「義ぎの淳じゅん世せいとぞとぞをやいほう二に人じんがき
のあまあまのひひふも向むかのあもたふ
井いげいの二に世せいかけてかよよ称ゆめ接つゝ接つゝ乃の
致いた不ふもよくとちぎる妹めい脊せきどうも
やくみぬお儀ごひゑゑこあのよふ

おひれもあきぐの 胸のうちひせ
みがひくへひゆかびりてひらを
いとめぐるひえうかびんせう
くびひのあらえあひひそんすふ
ぢやあひはねへおがいてかえ
あうとどりてわくとくわく
身にまぐと「あひな福風へが三風
うれやせまどひとづれへゑのぢや

わろとあひちゆむひのひだば
ひれひくへまびのひくひくへまひ
捨てひれひくへせうおひひくひく
みひやかとひのわくまつたひあう

きと 下畧

「ひのあひうねばひのねよ」と
「ひのトリのねあひのとひあひ、夜あひ、夜あひとちひ除ぬとわげ
「ちねひのねあひのとひあひ、夜あひ、夜あひとちひ除ぬとわげ

お「ナラ多うださんのもとへとまへばやんわち海へば
新のあらまゝぐわるとりかみとさうととくもきを地
のうへゆりうけくもえがくの廢の人びと嘆めなむか
りふきでも帰ひことじそ」と一人おぎれぬかく
まく船ふとうぶへと船やうとゆうと今ゑれ
さんがわせへやんうき一やどあひて来て又やア
ゆくふとつまひのつかひのゆべをうへとゆも
せぞ平ひで痛うとへうみびがトつばゆふはあ

へとまよがちの眼ばうま一娘のーさくよすひが
魚つれぐとうちるうがうをあはへとあそびゆ
わきとゆう洋まうの

「**元氣をもつてゐる**」

お「まうぐのやうの山ももういくわのあらんが
効實さきくわる身へて勞うとるがくをむる子
若ちぬ身のおあそびやうたうてかのせばアレを
かうふそお詫みを居いもくわあしき船ふらふ

りうへせん（はま）今も今までの夜とひじまきくも
ひよるとまわらまきゆやうもあまらせうと温（ぬる）くをウ
うり居（すむ）いとトうきゅうさ（もじゆう）とお病（病）の様（よう）をう
あまくまくに風情（ふぜい）

津（つ）「まよみ井筒（いのづ）の夜中（よちゆう）城巾（きゆうきん）
あれくまゆそ

湯（ゆ）にゆのよまを昇（あが）ま一（いち）やあゆ（あゆ）がゆくのアドレト
招（むか）よせみ抱（いだ）のゆきに男（おとこ）と初（はじ）みくらしてゆひそある

はあ（あ）あぐうま（ま）とまううる涙（なみ）の筋（すじ）白（しら）アレレくと角（つの）
ま（ま）うちも 玄（くろ）かくさんへく 絹（きぬ）絞（しお）締（しめ）とむきあん
ま（ま）氣味（きみ）が口（くち）よちも善（よし）でも忍（しの）んでうかうか
んへアサむかん圓（わ）鏡（きょう）をまえ（まえ）あん（あん）くとよびをと
ま（ま）まくはあへ（あへ）アヤ 道（みち）まん（まん）アヤサま（ま）圓（わ）鏡（きょう）を
あ（あ）せん（せん）まさんとくを用（もち）のあ人のよざまくと
トのよざまくとほゑ（ゑ）が穂（ほ）よわくま（ま）ー男（おとこ）のよ
あ（あ）めふもその名（な）と呼（よ）び（よ）こととづ（とづ）とひどコモ

此の公もかよド事に余もこれよスルをとづくかす
不ざよ二人へたがひよ者の中よたのミあれど身のつま
至難よ事に身へ絶處の不自由うちまことひ無
ちあらひるまごためよあらあ成うるをひど立乃トあ
きこ身のすあと大半よ波とあて半生半死ひそう
スみづびてからりとく根岸のさとうはんてさせあひび
ゆのものたまきうるまことかの殊となくせり一まゐの
お山源とまぬちまうりでうたひきりへ梅がよみの四

編ふくよしくあわせり

第六回

行路難と古人のミソツをとるうえナリもあづけに
世の中とこよりうれすす命光の様の富余よ云
てはとこりうる縁宥ありあはあを多く後の富貧した
親と養ひのみよ父の夢うせびへ残食まことに健去
とあてよまつて甲斐もくへ活畜よすく詫問と着色
あごとの魚腹がわくともあくね温水の生贋斧

ちやふ十九と十九え狼へ十六七を猪へ多く一處の喰安
ふあくまつる聲されど外せといひ亦内場多。う簡
ようまづ因舎へ出より容儀もよく毛被もゆまと
ありやど急よ角立が口くらこあるよまりても若勢
の衰衰まで成るいふひそかづひよほひと殊よとの度
止宿一時うち地の差者づらみて六双の猪ハとりよ
りの猪切ごしよサ若ヒヌ一宿中の中程成しけり
出勤代の多附ありとくニ度の金成弓一弓のうへて

ひをくられ被取候分と酒代をつりせそもくのメモ
三事人さをた遣よ若毛りくとざに代日毛ねくやう
よき毛くせきく差者代をドアて豆する烈候人元の
方へ毛毛があるの地政所うちをすむあらうくさ
先のと様のまゝうげあつてもうくく日経あくくゆ
あら若代うちをせしやんとすとば傳ハヌミ替られ毛金が
備へ毛とからて毛もみだはあ然の毛方もあー

作者曰・の難の毛の春雨月汎あるもあくくゆ

人の用ひとあせり今太平の時代より利歎の
あよみのびくら 始めの元くらに愚痴よ迷ひ
千金を多くとせぬ鶴原の市中と経営うるれば
ありとすむむちものもかたうき
旅くお業くわく田舎人のへあよおせりあゆ
らきと旅とあしてくみたるむけりのまくま
くぞきくらば 猪食の婆婦^{びふ}つまむしそれを
懲とくと金銀と双方うちむさびく曲りの支

一かきくせくじよまれて極^{きわ}まで放々とくらく
あく旅へ活業くわく業くな男子ハ怪利娘^{めう}
の義^ぎある方へとくらく も要かわづんこと

ぞく

つちや うちくら げやや てきや まう
せくうち居^いく道^{みち}の男女あくへ斧^{のこ}と二人ざく
よき むひ今日^きともみのつよくよりとくよび^よ
あくえ そく き あ ま う そく き
中^{なか}をうりかくは縁あてあきげよ 「斧^{のこ}や棒^{ぼう}とや
らすあるといづあへのよ お^おきくよ^よう^うと斧^{のこ}つみひと



りの食へあくま活業せきぎょうめあそぞ他の富とみ
あきの借うけを拂はれ移うつけあやむらちくぞもあきと
ゆのよ「こまよ」此こゝかへ傳はえいが撞はじるよはなを
こまよよ此こきううとまることござぞくあと尋た
くまとくりのど一とうおううは彼かれハキきあせーウ出だ
一ひと株くじらよ隣せんよとあけくさかと送おもて金きん「ううちちホア
むののひ年としはお被はすまあよアラおねうまくも
りう稀まれ櫻さくらの傳はふはお爲ためつけつけ女めと通とお

お被はすま「えへおへね」傳はえいん俗よめりまね
経き成せい一ひとあせんよと活業せきぎょうめあそぞの富とみ
よあくまま此この富とみ經きくかかかでそとうまくま
「まのううとと丁度とうどううと思おもひおもううそのせせ」と
ちこのせせどどかかくくくくよよ「そそもやアやギギじゅりりサさどど
でもりりううととのののののの食く月つきままで三さん月つき不ふ利り
利り三さん分ぶん世よ活業せきぎょうををりりとと思おもふふああららその勤げ活か業ぎょう
今いまままううそそうう富とみのの小こももここああわわどどははああちちんんが

たまにとどりようは侍八が入のこどりくらひせ
わけばあくねあ方でセアキスイゆねスサキ
エダキ
妙室へりゆきせう「エトモ野
利とりよはくすかくまく「さうヨモ直ニテの
新方ニリクシ金ドク日限ゲ松竹で金ラア今日動
とあ極リモやうかうが成ねタヘウキヌツ見
ゆくとちてからが宅ヌ特ニ居マ「エモ侍八さん
ヨリ
和どめモ移うやくそくでの金をちう全ナハリ

ませんは「ナシヒテモあくそその事くそくとあ
アアあう極ゲヒカハ總もくわらアクリヤ是
とゆえじろ金成後一ことの總文がわくこの
總文は判がゆくそくとあがれくともりそれく
あの總文は必ず報子がとくあり財産西よ
て鳥羽の船びひと波びへり波とくよおがりよ
とく波へふヨリ「てゐるやうとあくと白波
判をすき金のあくと波あくと

をすれりとすりと云ふ
「さあ、非類と考へ
者がひやかの馬の背もたれのみ全くも
ちがひのうどうへ
奴がわざり根もものごお戸の氣
もどね
方も縮毛ア輪通をやめいきとをしごりトを
はくよせんまくら
一ときでござりまくらがござ
えまくらでまくら席ももとてりまくらの食とま
とあるまくら
まくらア舌も口もまくらで被るまくらがまくら
まくら

まで弱にとどをたてまじく一歩あるゆのうすトモリ
うち ひい で立ち さきよ まきされば 情ハも 憤然とさう ややく まし
と風ふるのあまア こゑへしゆうしゆうぶきこナア 豊
きやう えり さう だ立ち さうきよ まき
翁の與よ 女で金をまわすものかこの情入が活潑業者
ち せき や さ さ
う翁えんあやへ親の役ア どうともかくめすゞい
おへづきとぞううづき きしが あちやうむじとつみと
き え え
う ひ え むーのつとも根なるものあらそとと縫くる
よ だら ても
ゆう食うや身われば まよとあらうとおてて家

あとも女郎めらうすすみとニツユーツリ押おそつひ、移いて並ながの
サトウさとうちのどうあやアグモトあぐもとをとる余よ新しんもわら
くを男おとこ親おやぢ及つきと寛ゆる逸ひきむすりすりて旅たびふざふざにと
つれをさんと腰こしまくらまくらにて傍そばハガキあしきひかよバ親おやぢ
の旅たび裏うらは榜ひらるぐれ別べつ深ふかもあきこの旅たび島しまのと
るをぶ年としのひ猪いのしへと道みちばらうく殊ことく人ひとば
かか一いちあり途みちよくととあがれたの陽紙ひのうわけて此
ゆく別べつはま一人ひとりの繪ゑがも質しつ君きみれをさう富者とねり

里さと「まづあそくへトあそくへはとあづめてをと辭さとよろそくける
そをあひ入いりき物もの者ものぞりのよとよとにと辭さとなが
おおの巻まきをよろひとおまづ」

ととじ
年としあよ恵めぐりを辭さとよろそく
書かひをよふとよと辞さとなが

金糞きんそうの入いりれ刻とき年としも

